

しょうしんげ 「正信偈」のおはなし①

「正信偈」は、親鸞聖人がお書きになられた『教行信証』^{きょうぎょうしんしょう}の行巻末に収められている讃歌です。

『教行信証』の正式名は、『顕浄土真実教行証文類』^{けんじょうどしんじつきょうぎょうしょうもんるい}といます。

「教」「行」「信」「証」^{しんぶつど}「真仏土」^{けしんど}「化身土」の六巻からなり、浄土真宗の教えが説かれた、浄土真宗の根本聖典です。

親鸞聖人自筆の国宝「坂東本」^{ばんどうぼん}が今も残されており、これはもともと坂東報恩寺に所蔵されていたものです。

親鸞聖人は、52歳（元仁元年・1224）の頃から『教行信証』を書き始められたとする説が有力で、茨城県にある稲田^{いなだ}の草庵（茨城県笠間市稲田）で著されたと考えられています。

そして80歳を過ぎた京都時代の最晩年まで、何度も推敲を重ねて書き直されたといわれます。

『教行信証』はすべて漢文で書かれており、とても難解な内容で、多くの経典や論・釈を引用して、浄土真宗の教えである、阿弥陀如来のお救いについて説かれています。

この『教行信証』の内容を凝縮した、『教行信証』「行」巻の最後に書かれている七言^{しちごん}（七文字）六十行百二十句の偈文が「正信偈」です。

正式名は「正信念仏偈」^{しょうしんねんぶつげ}といい、「正しく信じてお念仏させていただく偈」^{うた}という意味になります。

「正信偈」はお経のように聞こえますが、浄土真宗でお唱えするお経は「浄土三部経」といわれる

『大無量寿経（無量寿経・仏説無量寿経）』^{だいむりょうじゆきょう}、『観無量寿経』^{むりょうじゆきょう}、『阿弥陀経』^{ぶつせつむりょうじゆきょう}の三つであり、「正信偈」は実はお経ではなく、親鸞聖人が信仰の喜びをうたにされた「偈」すなわち漢詩です。厳密には、「経」ではなく「釈」^{しゃく}になります。

日本の仏教宗派の多くでは『般若心経』を称えますが、浄土真宗ではお称えしません。

『般若心経』は、真実を見抜く智慧と菩薩の実践行によって自分の力で煩惱を断ち切り、覚りに至ろうとする自力のお経で、素晴らしいことが書かれてはいますが、凡夫が自分の力で覚りを開くのは、決して簡単なことではありません。

これに対して「正信偈」は、自らははからいを捨てて、阿弥陀如来のお力すなわち他力におまかせすることによって救われる喜びが説かれたものです。

今日のように真宗門徒の日常のおつとめや法要の際に「正信偈」を用いるのは、本願寺の第八代目、蓮如上人が始められました。

蓮如上人は吉崎御坊におられた頃、「正信偈」に親鸞聖人が書かれた「和讃」を加えて、節をつけて「正信念仏偈・和讃」として、文明五年（1473）に木版を作って印刷されて、仏前での日常勤行にされました。

ですからこの形式は、500年の間受け継がれてきたわけです。

キリスト教で、宗教改革で知られるマルチン・ルターが、印刷された翻訳聖書を刊行したのは、蓮如上人が「正信偈」を刊行した約半世紀後だそうですから、正信偈の印刷は当時大変革新的なことでした。

そしてこれが、本願寺教団が発展した一因になったといわれています。

「正信偈」の全体は、冒頭の「総讃」（「帰敬の頌」）と「依経段」「依釈段」の三つに大きく分けられます。

最初の言葉、「帰命無量寿如来、南無不可思議光」は「総讃」または「帰敬の頌」と呼ばれ、親鸞聖人ご自身の信心を告白されたお言葉です。

この言葉より後は、二つに分けられます。

「法蔵菩薩因位時」から「難中之難無過斯」までの21行42句を、「依経段」といいます。

「経」すなわち『仏説無量寿経』別名『大無量寿経』に依って讃えられる段です。

この後の、「印度西天之論家」から最後の「唯可信斯高僧説」までの38行76句を「依釈段」といいます。

これはインド・中国・日本の七人の高僧がたの釈に依って讃えられる、お念仏のすすめが説かれた

段で、『無量寿経』の教えを受け継いでこられた、インドの龍樹菩薩、天親菩薩、中国の曇鸞大師、道綽禪師、善導大師、日本の源信和尚、源空（法然）上人という七人の高僧がたの教えを讃えられたものです。

『大無量寿経』では、お釈迦さまがこの世に出られて覚りを開かれたのは、苦悩する人々を救う經典である『大無量寿経』を説くためであったとされます。そしてお釈迦さまは、法蔵菩薩が長い間修行されて阿弥陀如来になられたいわれや、そのお徳をたたえられます。

「依経段」はさらに、阿弥陀如来のみ教えについて述べられた部分と、お釈迦様がおすすめになる部分と結びに分けることができます。

「法蔵菩薩因位時」から「必至滅度願成就」までが、「弥陀章」と言われる阿弥陀如来のみ教えです。

「如来所以興出世」から「是人名分陀利華」までを「釈迦章」と言って、お釈迦さまがこの世に出られた意味が説かれます。

「弥陀仏本願念仏」から「難中之難無過斯」までが「依経段」の結び「結誠」です。

それでは実際に、「正信偈」の「依経段」を味わってみたいと思います。

「帰命無量寿如来 南無不可思議光」

〈無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる。〉

《限りなきいのちの如来に帰命し、思いはかることのできない光の如来に帰依したてまつります。》

冒頭は、親鸞聖人の信心の告白と宣言のお言葉です。

最初の「帰命」と「南無」ですが、この二つはどちらも同じ意味です。

もとはサンスクリット語の「ナマス」(namas)という言葉で、それを漢字に音写したものが「南無」であり、意味を漢字に訳したものが「帰命」になります。インドでは、今も挨拶するときなどに「ナムステ」と言いますが、これもこの「ナマス」からきています。

帰命も南無も、^{きょうらい}敬礼する、^{きえ}帰依する、心から深く信じて敬う、という意味になります。

そして「無量寿如来」と「不可思議光」は、どちらも「阿弥陀仏」のことをいいます。阿弥陀如来の阿弥陀とは、インドのサンスクリット語の「Amita」（アミタ）という言葉からきており、これは「限りがない」「無量・無限」という意味です。

何が限りがないかという、「アミターユス」すなわち「いのちに限りがない」という言葉と、「アミターバ」すなわち「光に限りがない」という二つの言葉からきています。この「いのちに限りがない」ということが「無量寿（如来）」で、「光に限りがない」が「不可思議光（仏）」（思いはかることのできない光明の仏）です。

いのち（寿命）は時間的で過去・現在・未来を意味し、これは「慈悲」を表します。光明は空間的であり十方世界を、そしてこれは「智慧」を表し、闇の中からあらゆるものを照らして救ってくださります。

ですから阿弥陀如来は、あらゆる生きとし生けるものを漏らさず救う仏さまなのです。

「^{ほうぞうぼさいんにじ}法蔵菩薩因位時 ^{ざいせいざいおうぶつしよ}在世自在王仏所」

〈^{ほうぞうぼさつ いんに}法蔵菩薩 因位の時、^{せいざいおうぶつ}世自在王仏のみもとにましまして、〉

《^{あみだによらい ほうぞうぼさつ な の}阿弥陀如来が法蔵菩薩と名乗られていたとき、^{し せいざいおうぶつ}師の世自在王仏のみもとで、》

この部分から「^{えきょうだん}依経段」が始まります。「^{たた}お経によって讃えられる段」で、「経」すなわち『大無量寿経』に説かれる教えに基づいた讃歌ということです。

『大無量寿経』では、法蔵菩薩が仏となるために世自在王仏を師として修行されていたことが説かれています。

阿弥陀如来は、仏さまになられる前は、法蔵という名前の菩薩として師匠の世自在王仏のもとで修行されていたのです。

「菩薩」とは、人々を救うために仏になろうと修行している人のことで、まだ仏になる前の段階です。このような願いをもって修行をされている段階を「因位」といいます。

「^{とけんしよぶじょうどいん}観見諸仏浄土因 ^{こくどにんでん しぜんまく}国土人天之善悪」

〈^{しよぶつ じょうど いん こくど にんでん ぜんあく とけん}諸仏・浄土の因、国土・人天の善悪を都見して、〉

《^{ほとけ じょうど な た こくど にんげん かみがみ よ あ らん}仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって》

『大無量寿経』の中にある「讚^{さんぶつげ}仏偈」という偈文は、法蔵菩薩が師の世自在王仏のお徳^たを讚え、自分もそのようになりたいという願いを述べられて、仏となるために修行を実践し、あらゆる人々を救うために精進するという決意が述べられています。

法蔵菩薩はこの「讚^{さんぶつげ}仏偈」の後、世自在王仏に教^{おし}えを請い、世自在王仏は法蔵菩薩のために仏がたの浄土の成り立ちや、その国々に住む人々の善悪と国土の優劣を説き、それらを目の当たりにお見せになられたと『大無量寿経』に説かれています。それを偈文にしたものがこの部分です。

こんりゅうむじょうしゅしょうがん ちょうほっけうだいぐぜい
「**建立無上殊勝願 超発希有大弘誓**」

むじょうしゅしょうがん こんりゅう けう だいぐぜい ちょうほつ
〈無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。〉

《この上なくすぐれた願^{がん}をおたてになり、世にもまれな大いなる誓^{ちか}いをおこされました。》

法蔵菩薩は浄土のありさまを詳しく見られて、悪いものを選び捨てて、善いものを選び取り、最高の浄土を建設しようとされました。

法蔵菩薩は、あらゆる人々を救ってさとりに導きたいという願いをたてられます。これが「建立無上殊勝願」です。

『大無量寿経』では、法蔵菩薩が四十八のお誓い、すなわち「四十八願」をたてられたことが述べられます。これは「私が仏になったら、〇〇〇を実現させます。それができないなら、私は仏になりません」ということが誓われているものです。これが「超発希有大弘誓」です。

四十八の法蔵菩薩の願いの中で最も注目されるのが、第十八番目の願です。これは「第十八願」「念仏往生の願」「至心信樂の願」とも言われ、「たとえ私が仏になることができても、十方のあらゆる人々が心を尽くして、私の浄土に生まれることを信じて^{ねが}楽い、念仏したとして、その人々が浄土に生まれることができないなら、私は仏の覚りを得ることはないでしょう。ただ、五つの重い逆罪を犯す者と正しい教^{そし}えを謗る者だけは除きます」というものです。

ごこうしゆいししゅうじゆ じゅうせいみょうしゅうもんじつぽう
「**五劫思惟之掇受 重誓名 声聞十方**」

ごこう しゆい しゅうじゆ かき ちこ みょうしゅうじつぽう き
〈五劫にこれを思惟して掇受す。重ねて誓うらくは「名 声 十方に聞こえん」と。〉

《五劫という長い時間^{なが}思惟してこの誓願^{せいがん}を選び取り、名号^{みょうごう}（名 声）をすべての世界^{せかい}に聞こえさ

せようと重ねて誓われたのです。》

法蔵菩薩が願を起こされて、浄土の建設と衆生の救済のために思惟された長い時間が「五劫」です。

「劫」はサンスクリット語の「カルパ」の音写「劫波」の略語で、古代インドで最も長い時間の単位です。諸説ありますが、一劫とは、四方と高さが一由旬（諸説あるが、およそ 60 キロメートル）の巨大な石があって、天女が薄い衣で百年（あるいは千年）に一度その石をぬぐって、その石が擦り切れてなくなってしまうても、劫は終わらない、というものです。五劫はその五倍です。ですから、想像を絶する長い時間のことを言います。

『大無量寿経』では四十八願を述べられた後、四十八願の要約といわれる「重ねて誓う偈」すなわち「重誓偈」が説かれます。

「重誓偈」では、「人々を救うために最高の仏になり、苦しみ悩むすべての人を救いたい、その方法は南無阿弥陀仏の名号であり、そのために名号を世界のすみずみに届かせたい」というお誓いが述べられています。そして法蔵菩薩は修行の暁にさとりを開かれ、極楽浄土を建立されて、ついに阿弥陀仏という仏さまになられたのです。

それでは、今日はこのあたりでお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。